

行動分析学の点検：強化と強化スケジュール

企画者：日本行動分析学会研究委員会 坂上貴之（慶應義塾大学）・山本淳一（筑波大学）

話題提供者：平岡恭一（弘前大学）・吉野俊彦（早稲田大学）・井上雅彦（兵庫教育大学）

指定討論者：久保田新（藤田保健衛生大学）・山本淳一

司会者：坂上貴之

Key Words： 強化 罰 強化スケジュール

ほぼ半世紀にわたる年月を経験してきた行動分析学は、これまでに実に様々な行動的事実や理論を生み出してきました。しかし心理学の他の分野と同様、行動分析学もまた、新しい世紀の新しい問題に直面しています。21世紀に生きる、新しい行動分析学を創造していくためには、これまでの成果を検討し、その枠組み、概念、方法論をさらに鍛えていく必要があります。

この目的の一助となるよう、「行動分析学の点検」のシンポジウムは企画されました。本年度は「強化と強化スケジュール」に焦点が当てられます。言うまでもなく強化と強化スケジュールは行動分析学における中心的な概念であり、私達行動分析学徒にとっては、実験場面においても社会場面においても、最も身近な専門用語として接してきました。

しかしご存知のように、強化という概念はThorndikeの「効果の法則」から発展してきたものであり、行動分析学以外の研究者達もまた、例えば報酬といった強化と類似した概念を用いてきました。こうした概念はしばしば反応増強の説明概念として用いられることがありましたが、行動分析学は、強化や罰を、それぞれ反応に随伴する環境変化によってもたらされる反応増加や反応減少を指し示す記述概念として打ち立てた点で、大変ユニークな立場をとることとなりました。一方、この環境変化が新たに付け加えられるのか、それとも取り除かれるのかに対応して、それぞれ正・負という2つの修飾語が使われ、私達は都合4種類の反応変容に関わる手続きや事態を得ることになりました。負の強化や負の罰についての研究がまだ少ないとはいえ、現在もその分類枠の精緻化や拡張が試みられています。

実験的・数量的な行動分析の強化をめぐる諸研究の中で忘れてはならないのは強化相対性の概念であ

りましょう。反応遮断化理論はPremackの原理を発展的に継承し、現在最も支持されている強化の定性的理論です。この理論は（1）自由接近事態における反応配分比と（2）スケジュールによる反応遮断化の程度の2つによって、配分点からの反応の増減、すなわち強化と罰の関係が決定され、一般に、「より遮断化の程度が高い反応は、そうでない反応に対して強化子として働く」ことを予測します。配分点を変えるかスケジュールを変える事で、反応を増加させたり減少させたりすることができると考えることから、確立操作と強化スケジュールを関係づけた理論ということもできます。

強化相対性という考え方は、このほかにも1）強化の行動的定義を行った、2）場面間転移性を否定した、3）刺激—反応パラダイムから反応—反応パラダイムへの脱却を促した、4）ある活動への従事など刺激とは考えにくい事象を強化子として利用可能となり、応用場面に貢献した、5）強化理論と他分野の理論とを結合させる仲介役となり、理論的發展に貢献した、などの大きな役割を果たしました。

本シンポジウムには、行動分析学の様々な領域の研究者・実践者が、領域の違いを超えて問題を共有できるよう、異なる立場の話題提供者、指定討論者にご参加をお願いいたしました。平岡氏には数量的行動分析からの研究、とりわけ選択行動研究における強化のとらえ方を、吉野氏には強化と罰の対称性をめぐる議論を、井上氏には応用行動分析からの強化の諸問題を、また久保田・山本両氏には実験と実践の立場からの討論や問題提起を、他の領域の方にも分かりやすくお話いただくようお願いしてございます。多くの方々のシンポジウムへのご出席と討論へのご参加を期待しております。

Takayuki Sakagami